

ディルタイにおける歴史的思惟
——ディルタイのヘーゲル批判をめぐって——

入江祐加（大阪大学）

ディルタイにおいて精神科学の研究の対象は、個人、家族、構成された様々な団体、国民、時代、歴史的運動、あるいは歴史的発展の連続、社会的組織態、文化の体系や、それら以外の人間の全体からの断片であり、この人間そのものである。従ってこの科学群をそれらがすべて同一の事実、人間であるということに対する共通の関係によって規定し、自然科学から切り離す必要が生じてくる。自然は人間にとって疎遠であり、把握する主体を超越している。認識論が自然の知識の領域に留まる限り、認識論はその対象となっている現実の現象性を決して克服できないと彼は言う。自然科学に基づいた認識論は現前している外部の世界を可能な限り詳しく精査してきたが、それは知覚成立の物理化学的説明であった以上、人間が見聞きするという主観的心理体験は除外していた。このような主観的な経験をそのものとして問題とできるような領野がいかにして開かれるのであろうか。ディルタイが目指す精神科学は、自然科学の客観的説明によっては説明できない主観的経験を問題としなくてはならない。彼は自らの試みを「生を生そのものから理解する」と言う。

ディルタイは歴史主義から影響を受け、人間の社会や歴史のなかに現れる実在を抽象としてではなく、現実の部分内容として捉える。そして、歴史主義を乗り越え、精神科学の認識論的基礎づけが目指されるなかで、彼の思想のなかで体系的知識が要求される。人間の心理学や、国家や別の共同生活の形態における大きな連関と組織の研究によってしか、発展や形態形成の法則や合規則性は客観的に捉えられないとディルタイは述べる。こうして、個々の理論の歴史的な位置を規定し、発展の連関を詳しく説明する方法である「歴史的手続き」とその知的発展の歴史の地下の根を探し出す「体系的な手続き」という二つの方法が生まれてくる。『精神科学序説』のなかで、ディルタイは自らの課題を歴史的方法と体系的方法の総体を統合することであると明記する。

精神科学の体系はいかに相対的な個々の主観的なものと関係し、いかにして歴史のそれぞれの運動のもとで見出されるのか。ディルタイは、宗教ないし芸術作品と同様に、精神科学の体系もまた人生観や世界観を含んでおり、これを概念的思考にではなく、それを生じさせた人間の生動性にに基づいていることを証明しなければならないと述べる。このことは体系が発展史的に考察されるたびに明らかになると彼は言う。ディルタイはこの点で理性内に芸術と宗教とを通じて絶対知に至るいくつかの段階を区別したヘーゲルの仕事を受け継ごうとする。ディルタイは、ヘーゲルから影響を受け、歴史そのものが自己自身の知に向かって創造的に歩を進める考え方を叙述する。他方で彼はヘーゲルと袂を分かち、歴史は形式的な前提から生じ、形式的な前提に進むものではないと彼は述べる。ヘーゲルは精神と社会のどの段階にも、心的な状態に表れる多面性が含まれていることをみていないとディルタイは言う。生動性はさまざまな可能性をはらんでいる。だがヘーゲルは自分の前提どおりに直線的にふるまわなければならなかったと彼はヘーゲルを批判する。それゆえ本稿は、ディルタイの精神科学において生を生そのものから理解するために、彼のヘーゲル批判をもとにヘーゲルとは異なる歴史的思惟を新たに考察する。そのうえでディルタイの叙述する学に人間活動の一分野を秩序づける証明を見出すことを目指す。